慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランクリン文学の中世的なるもの：「富へ至る道」と「免償説教家の話」
Sub Title	Medieval aspects in Franklin's tales : "The way to wealth" and "The pardoner's tale"
Author	佐藤, 光重(Sato, Mitsushige)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.60- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランクリン文学の中世的なるもの
—「富へ至る道」と「免償説教家の話」

佐藤　光重

プロローグ

ベンジャミン・フランクリン研究はあまたあるが、ジェフリー・チョーサーとの比較研究となるとほぼ皆無に等しいのではないか。お誂え向きに『カンタベリー物語』には「郷士の話」（The Franklin's Tale）なるものがあり、ここでいうフランクリンとはむろん英国での14から15世紀における自由土地保有者（franklin）を指す。事実、『フランクリン自伝』[1]の冒頭部には、一族の逸話を収集していた伯父の覚え書きに、祖先がノーサンプトンシャアのエクトン（Ecton）という村に自由土地保有者として300年近く暮らしていたとの記述があったと紹介してある（4-5）。フランクリンは英国滞在中に同村を訪れ、教区の戸籍簿に祖父の出生届けを確認している（5）。このささやかな関連に言及しているのはジェニファー・T・ケネディー（Jennifer T. Kennedy）の 研究くらいだと思われるが、これとて『フランクリン自伝』における死と忘却のテーマに着目し、フランクリンが自分自身をあたかも故人であるかのように扱っている語り方を論じたものであり、チョーサーとの関連が主眼ではない。『カンタベリー物語』は格言の宝庫であるが、同じくフランクリン『貧しいリチャードの暦』（*Poor Richard's Almanack*）もウィットにあふれ、平易で世知に長けた多くの格言を収めたものである。貧しいリチャードことリチャード・ソーンダース（Richard Saunders）は、「実を言いますと、私自身が考え出したのはその十分の一もなく、他はすべて古今東西の名言を適当に拾い集めてきた」（「富へと至る道」291頁）とも告白している。このことから、格言には洋の東西を問わず多くの出典があり、そこには当然のことながらチョーサーの著作も含まれている可能性は否定できな

い。しかし格言の出典についてのウィリアム・ケリガンとマリーナ・ファヴィラ（William Kerrigan and Marina Favila）の研究にもチョーサーの作品は上がらず、ただ思想家ラルフ・ウォルド・エマソンや詩人ロングフェローの著作にチョーサーへの言及がある、あるいはチョーサーの詩を踏まえた詩句があることを指摘しているのみである。

もちろんアメリカ文学全体を見渡せばチョーサーの影響はより広範囲に及ぶだろう。たとえばヘンリー・ソロー『コンコード川とメリマック川の一週間』（*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, 1849）の章「金曜日」に比較的まとまったチョーサーへの言及があり、あるいは古英詩『ベーオウルフ』に登場する怪物グレンデルを主人公に据えた小説『グレンデル』（*Grendel*, 1971）の作者ジョン・ガードナー（John Gardner）がチョーサーの評伝（*The Life and Times of Chaucer*, 1977）を書いていることなどがすぐに想起される[2]。他方でフランクリンとチョーサーの関連となると、これまであまり注目されてこなかったようである。しかしながら、フランクリンのユーモアあふれるエッセイには『カンタベリー物語』を彷彿とさせる滑稽譚の数々が見つかる。「ポリー・ベイカー嬢の弁論」（“The Speech of Miss Polly Baker”）における逞しく寸鉄人を刺す弁達者な女性像は「バースの女房」を想起させるし、「情婦の選び方について友人への助言」（“Advice to a Friend on Choosing a Mistress”）の人を喰ったようなお色気話は「粉屋の話」、「荘園領管理人の話」、「貿易商人の話」や「船長の話」といったファブリオに起源を辿る滑稽譚を連想させる。とりわけ筆者が比較検討の価値があると思われるのがフランクリン「富へ至る道」（“The Way to Wealth”）とチョーサー「免償説教家の話」(“The Pardoner’s Tale”)[3]である。社会学ではマックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、文学研究ではミッチェル・ブライトヴァイザー『コットン・マザーとベンジャミン・フランクリン』（Mitchell Breitwieser, *Cotton Mather and Benjamin Franklin: The Price of Representative Personality*, 2009）やトニー・ウィリアムズの歴史小説『天然痘と信徒契約』（Tony Williams, *The Pox and the Covenant: Mather, Franklin, and the Epidemic that Changed America’s Destiny*, 2010）が典型的に示すように、とかくピューリタニズムから啓蒙主義への変貌、近代文学の曙と位置づけられるフランクリンの著作ではあるが、本論ではあえてフランクリン文学の中世的なるものに迫りたい。

枠物語

『カンタベリー物語』は大きな物語に小さな物語が組み込まれている枠物語であり、物語全体への序として総序があるだけでなく、組み込まれるおのおのの話にも語り手の前口上という序文にあたる部分があり、これは落語でいう枕の役割をなしている。話がひとつ終わればその話への聴き手の反応がつづくので各挿話は序と講評により囲われている。今回注目する「免償説教家の話」も語り手が自身の職業の手の内を暴露する序文に始まり、教訓譚を終えるや聴き手に寄進を募る語り手が免償を「売る」ことを試みるも、聴き手のひとりである宿屋の主人の怒りを「買う」（松田『カンタベリー』127頁）というオチが続いている。

「富へ至る道」もなかなか凝った枠物語である。語り手は『貧しいリチャードの暦』（刊行は1732年から57年）の著者リチャード・ソーンダースことフランクリンであり、リチャードがある時オークション会場で競りの開始を待っていると、植民地アメリカに課される重税への不満をかこつ買い手たちにむかって白髪の賢者（に見える）アブラハム老人（Father Abraham）が語った話をリチャードが伝えるという構成であり、リチャードの前口上にアブラハム老人の話が差し挟まれ、最後に再びリチャードの語りに戻るという枠物語を形成する。しかもアブラハム老人というのは外見こそ賢者風であるが、じつは『貧しいリチャードの暦』の熱狂的な愛読者で、語る言葉はほぼ暦からの引用という、自らの知恵も言葉もないコピペ人間にすぎない。この老人の話に傾聴するリチャードは暦の真の作者でありながら、アブラハム老人を通して自分が作成した無数の格言を聴き手として受け止めるという趣向になっている。

「免償説教家の話」では前口上とそれにつづく教訓譚とはいずれも語り手が免償説教家であるのに対し、「富へ至る道」は語り手がリチャードからアブラハム老人、そしてリチャードへ戻るという点は両作品の相違点のように見える。しかしアブラハム老人の話の内容は『貧しいリチャードの暦』から成り立っているため、事実上リチャードを語り手と見なすこともできる。結部でリチャードは老人の長いお説教を無駄話（harangue）と呼ぶが、老人の説教の言い回しも内容もすべてそっくりリチャードの著作からのつぎはぎで構成されているのであるから、老人の話への批判はすべてリチャード自身に跳ね返ってくる。

免償説教家は前口上で自分の職業のやり口を披露し、自分の商売が聖なる権威

を後ろ盾にした私利私欲を満たす手段であることを述べる点が露悪的である。「飲む、打つ、買う」を生きる楽しみだと公言してはばからない厚顔無恥な人物だが、その金儲けの手段であると吹聴して始める話はじつに良く出来た教訓譚（exemplum）である。この教訓譚では、酒に溺れ、自尊心の塊で横暴な三人の男が、近隣の人々に疫病をもたらしている死神を懲らしめようという暴挙に出るが、死神の手にまんまと落ちて大金に目がくらみお互いを殺し合う羽目になる。字義通りにも、寓喩的にも多彩に読み取れる見事な話であるが、世の中にはこの説教家のように立派な話をエサにしてはなにかと寄付を要求し、私利私欲を満たそうとする悪徳な宗教家もいるという、当世（2022年現在）にもどこか通じる教訓譚である。

じつは『貧しいリチャードの暦』の序文にもこのような露悪的な要素が少なくない。「富へ至る道」は26年間の読者のご愛顧に感謝し、その集大成としてこれまで量産してきた格言の数々を再構成して編まれた物語である。その第1号である1732年版（1733年用の暦）には、語り手リチャードが新たに暦を世間にお披露目するに至る動機が序文に記してある。それによると、当時の人々にとって生活に必要な情報を満載した安価な読み物である暦は世のため人のために編むべきものとされるが、そのような建前に騙されるほど世間のひとびとは愚かではなく、ソーンダースこと貧しいリチャードの本意もそこにはなく、実のところは金儲けのためだと開き直り冒頭から露悪的である。作者リチャードは稼ぎがなく、そのくせ高尚な天体観察を趣味とする、うだつの上がらない夫であり、貧乏暮らしでぼろ同然の服しか着たことのない妻からは、稼いでこなければ役に立たない夫の道具など焼き捨ててしまうと脅される。

> I might in this place attempt to gain thy Favour, by declaring that I write Almanacks with no other View than that of the publick good; but in this I should not be sincere; and Men are now a-days too wise to be deciev'd by Pretences how specious soever. The plain Truth of the Matter is, I am excessive poor, and my Wife, good Woman, is, I tell her, excessive proud; she cannot bear, she says, to sit spinning in her Shift of Tow, while I do nothing but gaze at the Stars; and has threatned more than once to burn all my Books and Rattling-Traps (as she calls my Instruments) if I do not make some profitable Use of them for the good

of my Family. The Printer has offer'd me some considerable share of the Profits, and I have thus begun to comply with my Dame's desire.[4] (3)

これはリップ・ヴァン・ウィンクルとその女房との関係を先取りするが、さかのぼればバースの女房にも似た強い奥さん（termagant wife）とその尻に敷かれる夫（henpecked husband）という中世以来のひとつの定番キャラクターである。つまりリチャードは貧しいばかりでなく、哀れ（poor）なのである。

しかしこの情けなく弱い夫は活字のうえでは口汚い。出版は金稼ぎのためだと暴露するだけでなく、この哀れなリチャードはユーモアとウィットに富んだ新機軸の暦によって、ライバル業者の死を予告してしまう毒舌ぶりも発揮する。暦を発行するのには急な必要性に駆られてのやむにやまれぬ事情があったとリチャードはいう。その事情とは、天文観測にもとづく星占いが告げる天命である。当該年の予測では、なんと年内にライバル業者タイタン・リードの死去が示されており、そうなると地元の人々は暦が入手できず困るであろうから、代わりにリチャードが暦の出版を始めたというのである。

Indeed this Motive would have had Force enough to have made me publish an Almanack many Years since, had it not been overpower'd by my Regard for my good Friend and Fellow-Student, Mr. *Titan Leeds*, whose Interest I was extreamly unwilling to hurt: But this Obstacle (I am far from speaking it with Pleasure) is soon to be removed, since inexorable Death, who was never known to respect Merit, has already prepared the mortal Dart, the fatal Sister has already extended her destroying Shears, and that ingenious Man must soon be taken from us. He dies, by my Calculation made at his Request, on *Oct*. 17. 1733. 3 ho. 29m. P.M. at the very instant of the ♂ of ☉ and ☿ : By his own Calculation he will survive till the 26th of the same Month. (3-4)

むろんこの星占いはでっち上げであり、いまだったら到底ゆるされない類の誹謗中傷であるが、植民地の出版業界が小さな市場を巡って生き馬の目を抜く競争をしていた様子がうかがえる[5]。

話の枠である部分の語りが話の主旨と矛盾するという相反性も両作品は共通

している。「免償説教家の話」では、話を字義どおりに解釈して、「諸悪の根源は金銭欲」（“*Radix malorum est Cupiditas,*” l. 334）と説教家は戒めるが、こうした話をするのも人々に悔い改めの心を起こさせて寄進を募り、自分では贅沢がしたいがためだという安い魂胆を前口上ですでに述べてしまっている。「富へ至る道」においても、アブラハム老人はお説教の冒頭で「賢者には一言にして足る」（“a *Word for the Wise is enough*”）（193）と述べておきながら一言では終わらず長話を始める。老人の説くところはつまるところ、裕福になる秘訣とは勤勉（industry）と節約（frugality）、稼いで無駄遣いしないことという、至極当然、いわずもがなのヒケツである。しかしこの二つの事柄を畳みかけるような異曲同工の格言を弄しつつ本人はといえば贅沢品を求めてオークション会場に出かけている。「助言を容れざる者は度し難し」（“*They that won't be counselled, can't be helped*”）（201）とは滑稽にもオークション会場に来ているご当人のことであることに気づいていない。同じくそれを聞いているリチャードも勤勉、節約のモットーを暦で繰り返し説いていたのに高価な買い物をしに来ている。ちょうど免償説教家が教訓話を聞かせながらもまったく聴衆を説き伏せられないように、競売が始まると「老人の戒めも税金の心配も何も彼も打ち忘れて、めいめい途方もないむだ金を使い始めた」（291頁）という始末。自分の格言を頭に詰め込んでいる老人もそれを聞いていた聴衆も節約などどこ吹く風、語り手リチャード自身も含めてあわれ物欲の虜である。

免償説教家は教皇の御印だの、司教や僧正の委任状を権威の徴として見せつけるものの本心からその霊験を信じているわけではない。それは仕事の邪魔をさせないためだと語り、持参する聖遺物は「ヤコブの羊の肩胛骨」（“a shoulder-boon/ Which that was of an hooly Jewes sheep”）（ll. 350-51）というインチキまがいの代物であるところから、説教家は自分が背負って立つ教会の権力を笠に着つつ、実は自身では権威を愚弄してもいる。得意の説教も「とほうもないでたらめ」（“false japes”）（l. 394）、説教の目的とは「金をもうけることだけで、人の罪をさとすのでない」（“For myn entente is nat but for to wynne,/ And nothing for correccioun of synne”）（ll. 403-04）とまで言ってのける。

> I rekke nevere, whan that they been beryed,
> Though that hir soules goon a-blackeberyed!

For certes, many a predicacioun
Comth ofte tyme of yvel entencioun; (ll. 405-08)

人が死のうが死んだ人の魂が往生できずにいようが知ったことではない、と説教家は開き直る。そもそも説教というやつは、「悪い根性」（“yvel entencioun”）からやる人が多いのだという。

「富へ至る道」でのリチャード・ソーンダースの場合、権威には服しているようでいて、そのじつ権威への反抗の徴とも見て取れる言動がある。権威に服しているのはアブラハム老人である。なにしろ英国の重税を不服とする人々に向かい、重税よりも浪費癖のほうがはるかに過酷な徴税吏であると説くのであるから、質素倹約の勧めとは英国の不公正な制度を甘受せよと説くに等しい。じっさい老人は英国に重税を払うことになるオークションに出向いているのである。これに対してリチャードは、「富へ至る道」序文を文壇という権威を否定することで始めている。

I have heard that nothing gives an Author so great Pleasure, as to find his Works respectfully quoted by other learned Authors. This Pleasure I have seldom enjoyed; for tho' I have been, if I may say it without Vanity, an *eminent Author* of Almanacks annually now a full Quarter, my Brother Authors in the same Way, for what Reason I know not, have ever been sparing in their Applauses; …. I concluded at length, that the People were the best Judges of my Merit; for they buy my Works; and besides, in my Rambles, where I am not personally known, I have frequently heard one or other of my Adages repeated, with, *as Poor Richard says*, at the End on't; this gave me some Satisfaction, as it showed not only that my Instructions were regarded, but discovered likewise some Respect for my Authority; (193)

権威（authority）を巡る言葉遊びとして、「学識ある著述家」（learned Authors）、これに対立する自身は「相当名を知られている者」（an *eminent Author* of Almanacks）とある。語源的に “authority” とはラテン語の「生み出す人」（*auctoritas* すなわち author）に「…であること」という接尾辞を付したものである。ここでは

著作への賛辞がどこからやってくるかという議論を通じて比喩的には権力争いが見て取れる。しかもその権威の在処とは「この自分にも見所があると、一番よく分かってくださる」（discovered likewise some Respect for my Authority）「世間一般の人々にある」（the People were the best Judges）というのである。

解釈の多層性

じつのところ「免償説教家の話」では、三人の悪党が地獄に堕ちる話に込められた寓喩の多層性を読み取らねばならない。「諸悪の根源は金銭欲にあり」と免職説教家が述べる時、説教家は表層的にこの訓話を解してしまっている。

> チョーサーは（中略）何らかの教会批判をしようとしたわけでも、また教会制度の堕落や職権の濫用を描こうとしたわけでもない。むしろ、教義や制度そのものに潜む矛盾に光を当てることで、テクストに内在する解釈の多層性という中世的なテーマに目を向けていると思われる。（松田『カンタベリー』122）

悪魔を退治しようと豪語する悪党三人は、泥酔した状態であり、これは比喩的には霊的に死した人間をあらわす。死への勝利とは「死を神の代理人と認識して、その前にキリストのように謙虚に身を委ねるしかない」（同129）という抽象概念までに思い至ることはこの三人の男にはなく、松田の謂う「死に至る誤読」を犯しているゆえに彼らは滅ぶ。三人の悪党はまた「死を殺す」という誓いを立てるが、死を克服できるのは復活したキリストのみであるから、三人は三位一体（神と子と聖霊）とも考えられ、あるいは人間を堕落させる三つの敵（俗世、肉体、悪魔）の寓喩としても読み取れる（同126）。

このような多層的な読解はもちろん「富へ至る道」にも当てはめられる。たとえば、老人の説教には借金を戒めるくだりがあるが、借金とは支配国による植民地支配の隠喩として受け取れる。『フランクリン自伝』では、フランクリンが現在でいう学会や慈善団体、非営利団体をも兼ねる秘密結社の類をいくつか結成したことが述べてあり、そのうちでもジャントー（Junto）がとかく有名である。この他にもフランクリンは「完全なる自由人の協会」（the Society of the *Free and*

Easy）(95) と呼ぶ結社を作った。ここでいう自由とは一つはピューリタンの末裔らしく悪癖（Vice）からの自由であり、もう一つは勤勉と節制とによる借金からの自由を意味する。「借金というものは、人を束縛して債権者に対して一種の奴隷にしてしまうものである」（[Debt] exposes a Man to Confinement and a Species of Slavery to his Creditors）(95) と自伝は説く。いわば債権者と債務者との関係に支配国と植民地との間柄が隠されている。債務者が植民地の比喩であることは「富へ至る道」にはいっそう顕著に記してある。

> What would you think of that Prince, or that Government, who should issue an Edict forbidding you to dress like a Gentleman or a Gentlewoman, on Pain of Imprisonment or Servitude? Would you not say, that you are free, have a Right to dress as you please, and that such an Edict would be a Breach of your Privileges, and such a Government tyrannical? …. Then since, as he [Poor Richard] says, *The Borrower is a Slave to the Lender, and the Debtor to the Creditor*, disdain the Chain, preserve your Freedom; and maintain your Independency; (200-01)

衣服に贅沢をしすぎたために借金し、貸し主に頭が上がらなくなる様子を、専制政府に基本的人権を侵害される者として喩えている。借金をせず経済的な自立を聴衆に勧める体裁で大英帝国からの自由独立を訴えるかのようにも読み取れるメッセージ性がここにはある。

アブラハム老人の説教も馬耳東風、人々は相変わらずオークションに殺到してしまうが、リチャードは自分が恥ずかしくなり、「古い上着でいましばらく我慢しようと思い直してその場を立ち去った」（291頁）のであるから、彼の行動は舶来品をボイコットして英国支配に抵抗した、後の独立運動の予型（type）として読むことができる。後にボストン茶会事件（The Boston Tea Party, 1773）では重税を課す紅茶を、過激派「自由の息子たち」（the Sons of Liberty）が海に投棄するまでに至る。「富へ至る道」が出版されたのは1757年であるが、独立戦争をもくろむ自由の息子たちが印紙条例に反発して大規模な攪乱運動に走るのは8年後の1765年である。しかもフランクリンが暦作者を引退する理由も、生涯暮らしていけるだけの貯金と不動産、文具店、製紙工場を始めとする事業を家族や知

人に託したからというよりも、なにより英国に暮らす植民地地権者ペン一族（ペンシルベニア植民地の設立者ウィリアム・ペンの子孫）の地主制度（proprietary）がもたらした弊害を是正するためフィラデルフィア植民地議会の代表として英国議会に働きかけるためであった。

さらには、「富へと至る道」のもととなる『貧しいリチャードの暦』が植民地アメリカで多くの読者を獲得しその格言が人口に膾炙したということは、読み物を共有することで多くの植民地人に一種の国民感情に似た連帯意識を生み出していたことも示唆する。この意味で『貧しいリチャードの暦』は、ベネディクト・アンダソン（Benedict Anderson）の謂う「想像の共同体」（imagined communities）に相当する帰属意識を生み出す媒体でもあったといえるだろう（Anderson 44, qtd. in Yamaguchi 43）。

中世の名残―十三徳の「習慣」

『貧しいリチャードの暦』は研究史の草創期からほら話（Hoax）に分類されてきた[6]。とりわけ、ライバル業者タイタン・リードの死を予告する辛辣で大げさなほら話はジョナサン・スウィフトからの強い影響を受けていることが早くから指摘されている[7]。しかしタイタン・リードの死を予告した第1号の暦と、「富へ至る道」を掲載した最終号とでは読み物の性格が異なるのではなかろうか。同じユーモラスなほら話にしても、「富へ至る道」にはもっと古い教訓譚の痕跡がより強く感じられる。「富へ至る道」といえばかのヴェーバーが『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』において世俗内禁欲や天職といった概念の変容を見て取ったように、新しい近代精神の幕開けを告げるエッセイとして見られがちである。しかしこれとは逆に、アリストテレス『ニコマコス倫理学』に起源を辿る倫理学の伝統に位置づけられる『フランクリン自伝』の側面が指摘されている。しかもその側面とは重箱の隅をつつくような周辺的エピソードではない。他ならぬ、『フランクリン自伝』でも、いい意味でも悪い意味でもしばしば注目される「十三徳樹立」に関わる側面なのである。

十三徳樹立の扱いをみるとフランクリンは徳（virtue）とは絵画や彫刻、建築、航海術等と同様の技術（art）であると考えていたようである（Fiering 199）。それは修練の末に身に着ける技芸であるから、練習と反復の習慣が重要

となってくる。このとき、習慣（habit）とは今日でいう、歯を磨くとかジョギングをするといった具体的な反復行動とはいささか意味がことなる。そのためたとえば「徳の習慣」(habit of virtue)という言い回しは今日の「習慣」にはなじまない。そもそも “habit” とは*OED*によればフランス語の*habit*（衣装、ファッション等）と*habitude*（持って生まれた特性や傾向など）との二つの語源が重なって英語として定着したという。このうち「衣装」の意味は廃れてきたのに対して*habitude*の意味が英語としては発展してくる。実際、フランクリンの十三徳樹立でもわざわざフランス語*habitude*を用いている箇所がある。すなわち徳目を十三個も細分化したのは、徳性を具体化することで個別に訓練を集中することができると主張する箇所である。

> My Intention being to acquire the *Habitude* of all those Virtues, I judg'd it would be well not to distract my Attention by attempting the whole at once, but to fix it on one of them at a time.（84）

この*habitude*という言い回しはラテン語で*habitus*、さらにギリシャ語で*ἔχειν*にまで辿ることができ、アリストテレスのカテゴリー論でいう第8のカテゴリー、「様態・状態」（having, possession）に相当する（“habit” in *OED*）。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』、さらにはそれを敷衍したトマス・アキナスの議論で “virtue is a habit” という言い方が可能なのはhabitが人間の状態や特性として扱われているからである（Fiering 202）。古代ギリシャ語が元来持っていた意味合いほど包括的人間の特性を意味するわけではないが、フランクリンの十三徳論でいうhabitは現代的な「習慣」よりもずっと古い時代のニュアンスを保っている。

さらに*OED*でのhabitの語義を総覧してみると、これがフランス語から流入して初めて外来語として使われ出すのがチョーサーの活躍した15世紀初頭以降のことであることも判明してくる。試みにNorman Davis他編*A Chaucer Glossary*で引いてみると、チョーサー作品でのhabitには三つの意味合いが載っている。一つは衣服（clothes）、次が体質（bodily condition）および気質（disposition）、三つめが（体質、気質も含みうる）健康状態（constitution）となっている[8]。ここにもhabitの古い意味合いを見て取ることができるが、*OED*によるとアリストテレス哲学に由来する*habitus*を英訳した意味でのhabitという語の初出はチョー

サーの死後、16世紀末のことになる。もちろんそれ以前にはラテン語でアリストテレス倫理学を論じていたので、この観念をチョーサーが知らなかったということではなく、あくまで*habitus*の訳語としてhabitを用いるようになったのが近代初期ということである。このように新たな意味を付与したhabitはその後にフランシス・ベイコンが道徳論（*Of the Advancement and Proficience of Learning*, 1640）[9]において、まるでフランクリンを先取りするかのように、アリストテレス倫理学における道徳論が徳の本質論に傾倒するばかりで涵養の方法論に欠如していることを批判した。しかしベイコンはフランクリンのように徳を細分化するのでなく、徳を心がける決意の重要性を説くに至ってやはり方法論に至ることなく、アリストテレスにおいて自身が批判したはずの道徳論の陥穽にはまってしまう（Fiering 208-09）。ジョン・ロックの『教育論』（*Some Thoughts Concerning Education*, 1728）[10]では人間の徳性が条件付けや習慣化によって涵養しうるものとして論じられ、フランクリンに通じる、人間の徳性を涵養する性質としての習慣が議論の的になっている（同 210-11）。フランクリンが印刷屋の徒弟時代に文章修行の教本としたことが自伝に記されている『スペクテイター』紙（*The Spectator*）、その447号（1712年8月2日発行）にもフランクリンの十三徳論にも通ずる徳の涵養論が披露されている（同212）。

免償と公共事業

十三徳樹立の話は通例、ピューリタニズムの残滓と近代精神の萌芽として扱われるが、見失いがちな特質とはフランクリンの著作に潜むもう一つの側面、すなわち現代では希薄となった中世の伝統がまだ命脈を保っている側面である。簡便なフランクリン文学の説明として、ピューリタン時代には神のこと、あの世のことが人間の最重要項目であったのに対し、フランクリンでは人の重要な務めとは世のため人のため役に立つことという世俗化が起こっている、などとする。しかしこのように中世の名残から近代初期の精神を見てくると、図書館や消防署、道路整備など公共事業をアメリカ植民地で創始したフランクリンの公共精神（public spirit）なるものにも、中世の免償の発想が息づいているとも考えられる。

免償説教家が売り物とする免償とは、天国、煉獄、現世の教会員らが時空を超えて償いを分かち合うという公共の精神を前提とした制度である。中世カトリッ

クにおいて罪を告白し悔い改めた者は、生前に聖職者によって命じられた償いをすることになるが、生前に終えられなかった部分を死後に煉獄で完遂する際にその一部あるいは全部を免じるのが、免償の元来の考え方である（松田『煉獄と地獄』88－89）。キリストの受難、聖者の功績は「功績の宝庫」に蓄えられ無尽蔵であり、いくら融通しても尽きることがない。キリストの体であり、一人一人がその部分（『コリント前書12. 17』）であるため、天国、煉獄、現世の信徒らは「聖徒の交わり」（communion of the saints）[11]によって相互に助け合って全体の善に寄与するのである（同90）。やがてこの考え方から、免償は十字軍への参戦を免償と見なしたことに始まり徐々に役割が発展し、大聖堂建立のような大事業の財源となる寄進、聖遺物が祀られる教会への巡礼などにも免償が与えられ、ついには巡礼者に依頼して土産のように免償を譲り渡すことも可能となり、さらには巡礼以外でも教会の収益のため喜捨を募る職業が登場する（同90－94）。これが免償説教家である。免償の効力の大小が喜捨の金額に左右されたり、煉獄の火あぶりに対する保険として捉えられたりするようになるなど、免償は死後世界に対する会計学、火災保険のような様相をも帯びるまでにさえなった（同94－95）。チョーサーの描く免償説教家が露悪的であるのも頷けるような世俗化も進んでいたわけである。

フランクリンの公共精神が明確に記されているのはむろん自伝である。自伝は執筆時期にしたがい四部構成に区分けされる。このうち第1部は1771年、親友の司教が屋敷を構えるイングランド南部ハンプシャアの村トワイフォード（Twyford）にて、息子ウィリアム（1731年？－1813年、婚外子で生年不肖）に宛てて執筆されたものである。この執筆時期、フランクリンは英国での政治活動に行き詰まりアメリカ植民地へ帰郷する準備を整えていた失意の日々にあり、父子の関係においても英国人紳士として息子を教育してしまったがゆえに「母国」の意識でも断絶を深めつつあった。じつの父親が息子に宛てた回顧録で父親は比較的に等身大の人間味あふれる人物像で描かれてあり、若気の至りゆえのさまざまな失敗が記され、印刷屋出身らしくそうした失敗をしばしば誤植（Errata）と称して数々記してある。これら失敗談のうち最初の話が少年時代の逸話で、水車用の貯水池で釣りをする自分らが泥沼に足を取られないよう足場を作ろうと、近くに積んであった建築用資材の石を友人たちと勝手に運んで使ってしまったために、あとで親からこっぴどく叱られたというものである。この話に語り手のフランクリン

は「小さい時から私には公共的な企業精神があった」（an early projecting public Spirit）（9）と前置きを添えている。第1部はこのような失敗談の連続であるが、後のフランクリンが印刷屋として独立し、数々の公共事業を企画する成長譚として巧みな伏線を張り巡らしてある。第1部での数々の失敗談を伏線として、独立革命後に建国の英雄として語りだす第2部以降では世のため人のために尽力する公共精神の逸話が目白押しである。

「富へ至る道」は勤勉と質素倹約の効能を説く話であるので表立って公共精神の話はでてこない。しかし、『貧しいリチャードの暦』に見切りをつける1757年のフランクリンの身辺事情を考え合わせると、一概に公共精神の涵養とは無縁のものとも言えなくなってくる。自伝によると、1757年はフランクリンが渡英する年であり、その直前にフランクリンは植民地の議会に、「町の街路舗装を目的とする法律」（a Bill for Paving the City）を起草して提出した（126）。というのも当時のフィラデルフィアの道路は雨が降れば荷馬車の車輪で鋤き返されて泥沼となり、日照りが続くと埃がやたらと舞うからあった（125）。そこでフランクリンは往来に面した各戸から月に6ペンスずつ払うことを条件に、週に二回往来を掃き清め、たまった泥も片付ける仕事を考案し、これを引き受けるという貧しい男性も見つけてきた（125）。これこそ公共事業であり、この男性は今日でいう公務員に相当しよう。さらには夜間には道路にランプを灯すことも提案し、そのランプについてもロンドン製より耐久性があり使い勝手の良い新たな植民地製品の仕組みも考案した（126）。「富へ至る道」で舶来品に高額を支払う人々を揶揄するところには、このような社会事情も背景として読み込むべきである。

そもそもこの年に渡英することになった事情というのも、フランス植民地軍との戦争に備えるため必要な税を徴収することを、英国に在住する領主ペン一族が代理人である総督を通じて拒否しつづけたことに抗議するためであった（134）。「富へ至る道」はこの渡英を目の前にして書かれたものであり、その頃に植民地の人々は自身の稼いだ資金の使い道について一層の公共精神を発揮しなければならない状況にあった。したがってフィラデルフィアでの公共事業の遅れを憂うる当時のフランクリンにしてみれば、「富へ至る道」の設定のように英国の税金として召し上げられてしまう輸入品を買いあさるために植民地人がオークション会場に集っている場合ではないと、植民地の人々に訴えたい心境にあったことが容易に想像される。

エピローグ

「免償説教家の話」と「富へ至る道」に共通する顕著な特性として最後に指摘したいのは、こうした多層的な解釈を生み出す仕掛けがありながら、枠組みとしては軽い滑稽な話に仕立てている点であろう。ちょうどフランクリンの格言が真面目な人生訓に辛辣なユーモアを効かせているように、「免償説教家の話」も「富へ至る道」も語り手が自己矛盾の言動によってまさに「語るに落ちる」滑稽さがある。こうして聴衆や読者を笑わせておきながら、そこに金言（sententia）が込められている。真面目な金言だけでは面白みがないため、読者を楽しませる枠組みを用意しているのである。「富へ至る道」はアブラハム老人の説教を構成する材料となるのが面白くてためになる格言であり、言行不一致なことにいっこう気がつかない老人の姿が滑稽であり、その老人にやたらと引用されて同じく言行不一致な自分の姿に気づかされる哀れなリチャードの姿がまた面白い。「免償説教家の話」も「諸悪の根源は金銭欲にあり」とする格言は真面目なものであり、説教家の話に出てくる悪人の末路は悲惨なものであるが、その格言や教訓譚を金儲けの手段と暴露する説教家は極めて不真面目であり、聴く旅仲間らの心を打つこともできず宿屋の主人から罵倒されるところなども滑稽である。いずれの話も、伝えようとすることが一見すると簡単なようでありながら、言うは易く行うは難い金言であるため、それを語る者を通して書き手であるフランクリンやチョーサーらが、自分も実行できないことをあらかじめ言い訳しておいたほうが無難とばかりに、安全策として物語の枠をこさえてあるかのようである。だれもがもっている世俗的な欲求を「情欲」といい、わたしの手持ちのデジタル大辞泉には福澤諭吉『学問のすゝめ』からの引用、「痛きものを遠ざけ甘きものを取るは人の情欲なり」が載っている。つい浪費したり、怠けたり、金銭欲に動かされるのが人間の哀れなところであるが、哀れゆえの人間らしさ（humanities）が浮き彫りになる。

フランクリンならぬ郷士（franklin）が語る「郷士の話」には14世紀に占星学の本山ともいうべきオルレアン大学で学んだ学者が登場する（松田『カンタベリー』157）。この西洋の知的伝統たる占星術を取り入れた近代の便利な読み物である『貧しいリチャードの暦』は、植民地アメリカにも中世的なるものの流れが息づいていることを物語る。この暦のスピンオフとして誕生した「富へ至る道」

には、『カンタベリー物語』の「粉屋の話」、「荘園領管理人の話」、「貿易商人の話」、「船長の話」にみえる、中世フランスのファブリオのような笑いの要素がある。もっともファブリオにありがちな浮気の話題がないところはピューリタン的とでもいうところか[12]。フランクリンの生誕地ボストンの牧師らはイエス・キリストの精神を体現するものとして、ピューリタン入植者の歴史を予型論的に旧約のイスラエル人の歴史になぞらえる教訓譚（*exemplum fidei*）[13]を盛んに説教の話題とした。だが「富へ至る道」はそれとは異なる、「免償説教家の話」のような中世由来の教訓譚（exemplum）にむしろ近い。しかも古い形態をただ踏襲しているのでなく、教訓譚というジャンルをパロディー化し、リチャードの格言を引用するアブラハム老人の話を聴くリチャードという二重、三重の枠組みによって自己言及的なメタナラティヴに仕立てている。これはちょうど「免償説教家の話」にも当てはまり、説教家の話は教訓譚が「巡礼たちを前にした即興のパフォーマンスへと横滑りすることで、ジャンルに内在する解釈学的問題が露呈され」、教訓譚というジャンルを前景化することで「話の独創性はより明確な輪郭を帯びて」いるのにも似ている（松田『カンタベリー』184）。

「富へ至る道」はアメリカ文学史の伝統的な説明では、回心体験記（Conversion Narrative）の伝統を世俗化したパロディー、あるいは新大陸探検記のほら話（Hoax）の系譜と見なすことができるが、ここに植民地時代における中世的なるものを考察することで、植民地アメリカ文学にさまざまな形で伝播し変容をとげた中世の説話文学の系譜をも認めることができるのではないか。ひいてはアメリカに今日でも根強い中世趣味の見えない根源にも迫ることもできよう。むろん、中世の物語では運命や悪魔、魔法の実在性が大きな特徴であり、「富へ至る道」はそれらが影を潜めているあたりは極めて近代的とは言える。だが悪魔や、魔法めいた罠がのちにアメリカ文学ではマーク・トウェインの「不思議な少年」こと“The Mysterious Stranger”にまつわる3つの物語[14]や「ハドリバーグを破滅させた男」（“The Man That Corrupted Hadleyburg”）（1899年）に登場するのは、アメリカ文学における中世的なるものが脈々とフランクリンの時代から息づいていたことを証左するともいえまいか。

註

1 『フランクリン自伝』および「富へ至る道」(“The Way to Wealth”) からの引用は *The Autobiography and Other Writings*, ed. and intrd. by Kenneth Silverman, Penguin, 1986から行い、邦訳は松本慎一、西川正身訳、岩波文庫版を参照した。邦訳から引用した場合、ページ数に「頁」を付して示す。アブラハム老人の言葉を原文から引用する際にイタリックが頻繁に見つかるのは、老人が『貧しいリチャードの暦』から引用していることを原作でもイタリックで示しているためである。

2 ナサニエル・ホーソーンの短編「カンタベリーの巡礼者」(“The Canterbury Pilgrims”) やハーマン・メルヴィル『白鯨』第16章「船」(“The Ship”) に捕鯨船ピークォッド号の摩滅した甲板をカンタベリー大聖堂の敷石に例えている場面も別の例として挙げられる。メルヴィルは1849年に大聖堂を訪れている。

3 原文の引用は *The Riverside Chaucer*, 3rd. ed., Larry D. Benson, general editor, Oxford UP, 1988、邦訳は『カンタベリー物語』上・下巻、西脇順三郎訳、ちくま文庫、1987年から行う。ただしタイトル「免償説教家の話」はちくま文庫版の訳とは異なる。これは英語 “Pardner” の訳語として、罪を許すのではなく罪の償いを贖うという本来の意味を意識した松田隆美先生の訳語に合わせたものである。

4 *Poor Richard's Almanack* の引用は、復刻版 *Poor Richard: The Almanacks for the Years 1733-1758*, intrd. by Van Wyck Brooks, and illustrated by Norman Rockwell, The Heritage, 1964から行う。

5 フランクリンの予言が的中したというわけではないもののリードが死去するまでお互いの論争は8年も続いた。

6 古いものではJames Parton, *Life and Times of Benjamin Franklin*, Mason Brothers, vol. 1, 1864、あるいはJ. B. McMaster, *Benjamin Franklin as a Man of Letters*, Houghton, Mifflin, 1882, esp. chapter iv.

7 John F. Ross, “The Character of Poor Richard: Its Source and Alteration.” *PMLA*, vol. 55, no. 3, September 1940, pp. 785-94.

8 その他、語義については *Middle English Dictionary*, editor Hans Kurath, U of Michigan P, 1956、および *A Glossarial Concordance to the Riverside Chaucer*, vol. 1., Larry D. Benson, Garland, 1993、*A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Roman of the Rose*, John S. P. Tatlock and Arthur G. Kennedy, The Carnegie Institution of Washington, 1927を参照した。

9 Fieringの論文では *Advancement of Learning and Novum Organum*, Colonial, 1900, pp. 210, 228-31から引用している。タイトルの語 “proficience” は一般的には “proficiency” と綴られるがベイコンの本書を皮切りに現代まで稀に見える綴りである。

10 Fieringは *The Educational Writings of John Locke*, Harvard UP, 1968, pp. 114, 119, 129, 138, 170,215に言及している。

11　ちなみに「聖徒の交わり」といえば、ピューリタンも現世の「見える聖徒」（visible saints）と死後の「見えない聖徒」の間にこの関係性を見出す。

12　浮気を滑稽譚として扱いづらかった身辺事情もある。自伝第1部の想定読者である息子はフランクリンの婚外子であり、当時の姦通の罪は男性優位な社会の罪だと訴える「ポリー・ベイカー嬢の弁論」は婚外子をもうけた自分自身の悔悟と愛人への弁護であることは容易に読み取れる。

13　Sacvan Bercovitch, *The Puritan Origins of the American Self*, Yale UP, 1975, pp. 8-15, 23-26.

14　未完成なまま遺されたトウェイン晩年の本3作品については*The Mysterious Stranger Manuscript*, edited by William M. Gibsonでそのあらましを確認することができる。

参照文献

Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised edition. Verso, 2006.

Benson, Larry D. *A Glossarial Concordance to the Riverside Chaucer*. Vol. 1., Garland, 1993.

Bercovitch, Sacvan. *The Puritan Origins of the American Self*. Yale UP, 1975.

Breitwieser, Mitchell. *Cotton Mather and Benjamin Franklin: The Price of Representative Personality*. Cambridge UP, 2009.

Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales*. *The Riverside Chaucer*, Larry D. Benson, general editor, Oxford UP, 1987, pp. 3-394.（邦訳『カンタベリー物語』上・下巻、西脇順三郎訳、筑摩書房、1987年。）

A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Roman of the Rose. Edited by John S. P. Tatlock, and Arthur G. Kennedy. The Carnegie Institution of Washington, 1927.

Davis, Norman, et. al. eds. *A Chaucer Glossary*. Oxford UP, 1979.

Fiering, Norman S. "Benjamin Franklin and the Way to Virtue." *American Quarterly*, vol. 30, no. 2, Summer 1978, pp. 199-223. JSTOR, http://www.jstor.org/stable/2712323.

Franklin, Benjamin. *The Autobiography and Other Writings*. Edited with and introduction by Kenneth Silverman, Penguin, 1986.

（邦訳　『フランクリン自伝』松本慎一、西川正身訳、岩波書店、1957年。）

_____. *Poor Richard: The Almanacks for the Years 1733-1758 by Richard Saunders, Philom*. Introduction by Van Wyck Brooks, and illustrated by Norman Rockwell, The Heritage, 1964.

Gardner, John. *Grendel*. Illustrated by Emil Antonucci. Vintage, 1971.

_____. *The Life and Times of Chaucer*. 1977. Vintage, 1978.

Kennedy, Jennifer T. "The Death Effects: Revisiting the Conceit of Franklin's *Memoir*." *Early American Literature,* vol. 36, no. 2, 2001, pp. 201-34.

Kerrigan, William, and Marina Favila. "On Poems and Proverbs." *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 58, no. 1, Spring 2016, pp. 45-83. JSTOR, https://www.jstor.org/stable/26155344.

McMaster, J. B. *Benjamin Franklin as a Man of Letters*. Houghton, Mifflin, 1882.

Middle English Dictionary. Edited by Hans Kurath. U of Michigan P, 1956.

The Mysterious Stranger Manuscripts. Edited with an introduction by William M. Gibson, U of California P, 1969.

Oxford English Dictionary. Oxford UP, 2022. https://www-oed-com.kras.lib.keio.ac.jp/

Parton, James. *Life and Times of Benjamin Franklin*. vol. 1, Mason Brothers, 1864.

Ross, John F. "The Character of Poor Richard: Its Source and Alteration." *PMLA*, vol. 55, no. 3, September., 1940, pp. 785-94.

Thoreau, Henry David. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Edited by Carl F. Hovde, and introduction by Linck C. Johnson. Princeton UP, 1980. Vol. 5 of *The Writings of Henry D. Thoreau*, Elizabeth Hall Witherell, editor in chief.

Twain, Mark. "The Man That Corrupted Hadleyburg." *Mark Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, and Essays 1891-1910*, The Library of America, 1992, pp. 390-438.

Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism and Other Writings*. Translation and introduction by Peter Baehr, and Gordon C. Wells, Penguin, 2002.

Williams, Tony. *The Pox and the Covenant: Mather, Franklin, and the Epidemic that Changed America's Destiny*. Source Books, 2010.

Winther, Per. *The Art of John Gardner: Instruction and Exploration*. State U. of New York P, 1992.

Yamaguchi, Yoshinari. *American History in Transition: From Religion to Science*. Brill, 2020.

松田隆美『『カンタベリー物語』—ジャンルをめぐる冒険』慶應義塾大学出版会、2019年。

_____.『地獄と煉獄—ヨーロッパ中世文学と一般信徒の死生観』ぷねうま舎、2017年。